

酒豪連・浦本スクール

内田康夫（元埼玉医科大学教授／駿河台大学名誉教授）

いつの間にか浦本スクールの主だったメンバーには綽名が付けられていた。上級生クラスで、何事も几帳面な世話人役だった斎藤隆史さんは「塾長」、野外調査のベテランであると同時に山階鳥類研究所の全標本を誰よりもよく目を通して安部直哉さんは「名人」、出席率が一番低かった私は「番長」にされた。下級生クラスの優等生だった樋口広芳さんは「級長」だったと思う。上級生・下級生といってもただ歳の違いだけで、輪読会もそのあとの飲み会も全く同格だった。

このスクールの始まりは、確か1969年だったかと思うが、当時、私は故松山資郎さんに頼まれて、鳥研の嘱託として第4研究室（生理学）を立ち上げる準備をしていたが、隣室の第3研究室（生態学）に浦本さんがおり、そこに杉崎一夫さんがよく顔を出して英語の勉強と称し鳥学の原著を読むことになった時からである。まもなく、安部（鳥研の標本整理の嘱託だった）と斎藤の二人が加わった。

第3、第4研究室の間には内扉があって、廊下へ出ずに往き来ができた。隣りで楽しそうな笑い声がすると、つい私も内扉から顔を出した。浦本さんは、部屋の戸袋の下の方に常時ウイスキーの瓶を1〜2本隠していた。講読が一段落すると早速取り出して皆でチビリチビリ始める。浦本・安部・斎藤はかなりの酒豪、杉崎も飲める口だったがすぐ真赤になった。私は全くだめで一口二口のお相伴だけなので肩身が狭かった。

鳥研での読書会は、夜が遅くなり過ぎるとか酒も飲んでるとかの内部告発が出て、事務局から苦情が来た。そのうち浦本さんが鳥研を辞め、私も辞めた。その後、中央線中野駅に程近い中古のマンションの一室を借り、会はそこへ移った。部屋の標札は「動物の科学研究会」で、哺乳類学の小原秀雄さんらもよく顔を出した。研究者やそれを志す若手だけでなく、新聞・雑誌の自然モノ担当のジャーナリストや、その他よくわからない連中も出入りし、曜日別時間別のタイム・テーブルを作って共同利用した。部屋代はそれら利用者全員の拠出金から出した。浦本スクールは、当時毎日新聞の論説委員だった永戸豊野さんが最新の鳥ニュースがほしいというので、それぞれ手持ちのニュースを小記事にして渡していた。その原稿料

がスクールの口座に振り込まれるので、この一部を拠出金とした。その頃、メール・オーダー社から「週刊アニマル・ライフ」という動物週刊誌が発行されていたが、その鳥の項目はすべて浦本スクールで分担執筆した。その向こうを張って、朝日新聞が「世界の動物」シリーズを出したが、その鳥分野も請け負った。

出入りするよくわからない連中の中にはこういうのもいた。ある時、ハワイ出身とか自称する20代のヒッピーみたいな小柄な男が転がり込んで来た。何日もここに寝泊りし、台所や風呂場をいのように使い、自分のシャツが汚れて来ると、杉崎の洗いたてのシャツを指さして“Exchange! Please?”とか図々しいことをいった。そのうち急に姿を消し、皆が彼のことを忘れた頃、新聞の片隅に小さな記事が出た。『対馬でグリーンピースのメンバー逮捕——イルカ捕獲妨害で漁網ズタズタ』逮捕されたのは彼だった。

我々はテキストに、D. Lack, E. Mayr, K. Lorenzらの著作を次々に選んだ。Lackのものが多かったが、ロビンにしろシジュウカラにしろ、そこから個体群生態学の方法論の何たるかを学んだ。ダーウィン・フィンチにおける形質置換という現象から、Mayrの種分化の理論へ進み、地理的隔離から種の多様性への進化の筋道を理解した。樋口の初期の研究のオーストンヤマガラとスダジイの関係などは、まさにMayrを踏まえたものだった。

Lorenzはむずかしかった。冒頭は、カント以来のドイツ認識論が延々と続いた。Whiteによる英訳本を使ったが文意がよくつかめない箇所が次々に出た。試しにドイツ語の原著を手に入れて比較対照したら、スルスルと理解できた。邦訳の哲学書は難解なものの代表にされるが、英訳も哲学的な文章は下手くそだとわかった。

当時、日高敏隆訳のLorenzやTinbergenが相次いで出版され、リリーサーやインプリンティングなどの用語が脚光を浴びることになったが、ジャーナリズムはもちろんのこと一部の専門家もまちがった使い方をしていることがあった。難解のようでも原著に当たることが早道だった。動物の行動と認識（認知）の問題についてLorenzが強調したのは、擬人化の徹底した排除だった。Lorenzはノーベル賞受賞以来、米国の行動心理学



2001年4月7日、浦本昌紀先生（最前列中央）の退職お祝い会。

の一派と激しい論争をくり返していたことから、これは当然のことといえた。

ともかく、1960年代後半から1970年代にかけて、日本のどこの大学の授業でも研究室でも学べないことを、我々は浦本スクールで学んだ。競争排他、共進化、多様安定相関などの概念から読み解くことは、鳥学分野を超えてマクロ生物学全体の理解に不可欠のことと知った。

こうした室内の勉強会の一方で、浦本スクールのメンバー一人一人がそれぞれのフィールドを持ち実際の調査研究に携わっていたことも大きな特色であった。順番に、一晩一人にしぼってそれまでの結果と考察を述べ合った。

安部は箱根山の仙石原でキセキレイを、斎藤は東宮御所でシジュウカラを、内田は那須と浜松でツバメの繁殖と越冬を、それぞれ徹底した標識による個体識別に基いて個体群の分析を試みた。樋口は伊豆諸島小笠原諸島での種分化・亜種分化を分析した。杉崎はアホウドリ・ミズナギドリ・カツオドリなどの海鳥の遠洋における調査を日本で最初に手がけた。

一人の発表ごとに、野外調査の熱気をそのままに（アルコールの熱気も加わって）、これこれの

点については誰にも譲れないと侃々諤々の議論が深更まで続いた。これらの大量のデータや成果は、部分的には発表されているものの全容は今だに未発表のままである。

やがて、杉崎はニュージーランドへ赴き、内田は創立メンバーの一人として立ち上げた埼玉医科大学の業務に追われて去り、1980年代前半には中野のマンションも引き払った。次いで樋口は渡米したが、安部・斎藤は残り、やゝ遅れて加わっていた大堀聡、尾崎清明、茂田良光らの若手と共に新宿の喫茶「たきざわ」へ移ったと聞いた。その後、かなり経ってから、偶然「たきざわ」で浦本スクールの面々に出会ったが、その時のメンバーは和光大学のゼミ生のようなだった。テキストは、哺乳類や人間がテーマと思われた。

もう一つ、つけ加えておきたいことがある。それは樋口夫妻の結婚式のことである。まだ中野のマンションで集まっていた頃、東大の三四郎池をのぞむ山上会議所（と当時呼んでいた）において、浦本スクール一同によって挙式された。あまり上手とはいえない浦本さんの祝辞が、窓から吹き入る青葉の風の流れで行った。